



体育の学習と「副読本」

～子どもたちと運動との出会いを
コーディネートするために～

東京学芸大学教授 松田 恵示

体育の時間に「副読本」って必要なの？

算数、国語、理科、社会など教室の授業では、教科書や副読本、副教材などを使うことがほとんどである。けれども、体育の授業では、副読本などを使うことはそれほど多くない。体育の学習は子どもたちが実際に体を動かして行うものだから、本などに目を通させているよりも、できるだけ運動を多くさせたい。こういう思いが私たち教師にあるのかもしれない。あるいは、子どもたちのほうにも、教室で座って行うほかの授業とは違って、運動場や体育館やプールで思いっきり運動できるのが体育の時間だから、本を持って「勉強」みたいにするのは楽しくない、という思いがあるのかもしれない。こういう体育の授業に対する素朴な「感じ」があるので、体育の時間に「副読本」と言われても、正直なところ「必ず必要だ」というふうに思っていないという現状があるのだろう。

この点では、体育の学習において副読本はどんな役に立つのか、といった、副読本の教材としての価値や可能性などについては、あまり考えられたことがないようにも思われる。けれども、あらためて副読本に触れてみると、それにはふだん気づかない大きな力が隠されており、少し「もったいない！」と思えるのである。そこでここでは、あらためて、体育の学習における副読本のもつ意味や可能性について、少し考えてみたい。

体育が「活動しているだけ」ではなく「学習」になるために

体育の時間は、子どもたちの好きな時間である。もちろん、なかには苦手だったり嫌いだったりす

る子どももいるけれども、運動やスポーツの行い方や学級集団の雰囲気などが整えられれば、活発に活動する子どもが増える時間である。ところが、難しいのは、こうして子どもたちに好まれる時間であるだけに、活動は楽しまれていた一方、教科の時間としてしっかりと「学習」になっていたのかどうか。そのあたりが少し怪しくなるときがある、ということである。学級会や運動会などの特別活動の時間や、休み時間や課外の時間などでも、運動やスポーツをする機会はあるから、ただ「活動しているだけ」では、体育の時間としては不十分だと言わざるをえない。けれども、行っている中身は同じ運動やスポーツだから、それを「学習」するというのを、どうすれば体育の時間でしっかりできるのか、このことが意外と難しいのである。

このように書くと、「体育の時間は学習だから、やっぱりしっかりと技能を身につけさせたり、高めさせたりしないとダメだ」というふうに感じられるかもしれない。しかし、言いたいのはそういうことではない。学習指導要領にも繰り返されているが、体育の目標は「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎」を育て、身につけることであり、これは単に「技能習得」だけの問題ではない。さらに大切なことは、「身につけたり、高めたり」ということを、単に先生が「させる」という形で指導するのであれば、それは「訓練(トレーニング)」であって、「学習(ラーニング)」とは呼ばれない、ということである。

では、体育の時間が子どもたちにとって「学習」になる、というのはどういうことなのだろうか。

そもそも「学習」とは、例えば、同じ失敗を何回も繰り返してしまったときに「学習がないな」などと言われてしまうように、経験を通して行動が変化すべく知識や技能を蓄えていくことを指している。体育で考えるなら、鉄棒の学習とは、鉄棒の経験を通して「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎」を蓄えていくことである。鉄棒の楽しさ、技能、態度、練習のしかた、知識、友達との協力のしかたなど、さまざまな内容がそこにはあろう。ただ、このときに重要なことは、「鉄棒の経験を通して」という最初の部分が、ただの「活動」になってしまえば、それは知識や技能を蓄えさせるほどの経験にはならないという点である。ここでの経験は、「意味ある経験」になる必要がある。つまり、「自発的・主体的」な「行動を変化させる」ほどの経験である必要があるということなのである。

このような経験となるためには、子どもにとって、それが「ねらいをもった活動」になることがいちばん大切なことである。なぜなら、「ねらい」をもって活動するということは、そもそも「ねらい」が単なる「課題」等ではなく、自分自身の意志に基づいて心の中にもつものであるから、「自発的・主体的」なものである。また、「ねらい」をもって活動するからこそ、活動の結果を「ねらいに沿ったものであったかどうか」で評価できることになり、自分自身が変化することを促すことになるからである。休み時間に行う運動では、例えば「戦術を工夫してゲームをがんばろう」とか「もっとチームワークがよくなるように努力しよう」などと、「ねらい」を立てては行われぬ。だからこそ、それは「やりっぱなし」になるし、「やりっぱなし」でよいからこそ、休み時間に気軽に楽しめる。けれども、「ねらい」をもった活動となれば、「やりっぱなし」ではなく、運動後に反省し、「よかった」「悪かった」という形で振り返るとともに、成果を確認したり、課題を認識したりする。こういう「ねらいの設定—活動—評価—修正」のサイクルこそが、知識や技能を蓄えさせ行動を変化させていくのである。

「ねらいをもつ」ための指導と「副読本」

こうなると、体育の時間に、どのようにすれば子どもたちにしっかりと「ねらい」をもたせ

ることができるのか、が問題となる。「これがねらいだから、みんなしっかりやりなさい」というように、「させる」ように指導するだけでは子どもたちが「ねらい」をもつことは難しい。

ここで、大きな役割を果たすのが「副読本」であろう。「ねらい」というのは、「こんなふうになりたい」「あんなふうになりたい」という形で、子どもたち自身の心の中から現れる。例えば、サッカーをやっていて、子どもの言葉でサッカーというゲームの特性やポイントなどが豊富な図とともに書いてあると、「こんなふうになりたい」「あんなふうになりたい」という子どもの意欲と目標が生まれてくる。「ねらい」とは、このように子ども自身が自ら情報に出会い、興味や関心を引き起こされたところから生まれてくるものである。

大人になった私たちでも、例えば、どこかに旅行に行くことになれば、まずは「ガイド」や「雑誌」を手に入れようとすることが多い。自分なりに、訪れようとする場所の情報にふれ、「なるほど」と頭の中のイメージが膨らみ、そして「ここここは行こう」「これは食べたいな」「これはお土産に買って帰りたいな」など、旅行先で「したいこと」、つまり旅の「ねらい」が自然と立てられていくのではないだろうか。このように、「自分から情報を読み込もうとする」こと、「文字以外の情報からイメージが喚起される」こと、さらには「内容が豊富で本質をついている」こと、あるいは「自由に好きなときに手に取れる」といった特徴が、私たちにこのような「ねらい」をもたらすのだと思う。そして、旅行が終わったあとも、部屋の本棚に「ガイド」や「雑誌」を残しておく、ふとしたときに手に取って楽しかった旅行の思い出をたどりながら、「もう一度行ってみようかな」「今度はここもまわりたいな」などと、変化した自分を実感するとともに、新たな「ねらい」を見い出すきっかけとなったりする場合も少なくないのではなからうか。「ガイド」や「雑誌」がもつ、「出会い」をコーディネートする力である。

このように考えると、「副読本」は、子どもたちと運動との出会い＝学習をコーディネートするまさに「ガイド」である。もちろん、「ねらい」をもたせる指導は、「副読本」のみによって行われるものではないが、この教材のもつ力を活用することで、まずはどの先生もが「ねらい」をもた

せる学習指導にやさしく取り組むことができる。本来、運動は「言葉」で伝えにくい性格をもっている。しかし、「副読本」には、イラストや写真で、視覚的にそれを把握することができる工夫が随所に凝らされている。このように、「こんなふうにしたい」「あんなふうになりたい」ということを、子どもたちに「ねらい」としてもたせる支えになるところが、「副読本」の最大の力であろう。

逆に言えば、体育の学習指導において、「ねらいをもたせる」学習指導のあり方に、私たちは少し無頓着になりすぎているところはないだろうか。「技能をいかに身につけさせるか」とか「いかに運動を楽しく行わせるか」から、授業づくりを始めてしまっていないだろうか。体育の時間は、子どもたちにとって「学習」になっているだろうか。「副読本」の意義や力について教師自身が知ること、たいへん重要なことであるように思われる。

学習言語の獲得とつながりを生み出す「副読本」

次に取り上げたいのは、体育の時間における「学習言語」の問題である。学校の教科学習の時間には、日常会話にはない「言葉」がたくさん出てくる。例えば、先の「ねらい」や、よく授業で使われる「めあて」といった言葉もそうである。「相手チームのよいところを伝えてあげましょう」とか「つまずいているところを教えてあげましょう」といった言葉も実はそうである。この種の言葉は、子どもたちの日常会話には出てこない。授業でのみ使う特殊な言葉なのである。「ねらい」や「めあて」という言葉が、特殊な言葉になっていること自体、私たち教師は忘れがちであるが、例えば、クラスにもし帰国子女の子どもが転入してきたとしたら、こういう言葉をすぐに理解することができるかどうかを考えてみると、よくわかると思う。あるいは、小学校に初めて入ってきた1年生を思い浮かべてもいい。このような言葉に馴染ませ、学校では大切な言葉として理解させることが、子どもたちを指導するときに最も気を使うことの1つであろう。

確かに、よく考えてみると「今日のめあてはなんですか?」という問いを日常生活で行えば、ちょっと変わった言葉となってしまう。職員室の朝

の打ち合わせで、「今日のめあてを確認しましょう」などとも校長先生に言われたら、大人の間でも、確かに変な感じである。授業でしか流通しない、といってもよいだろう。では、なぜこのような言葉を使って教科の学習が行われるかということ、それは子どもたちに、日常生活に貼りついた経験に基づく理解を超えて、日常世界とは逆に距離をとらせることで、しっかり「考えたり」「行動したり」できるようになり、これまで知らなかった新しい力を身につけることに役立つからである。ものを「対象化(少し距離をとって眺めてみること)」して捉えたり、かかわったりして身につけようとする、といった「学習する」ということを子どもにもよくわかるように、特別な言葉を使って取り組ませようとするからである。

この意味からすると、「相手チームのよいところを伝えてあげましょう」とか「つまずいているところを教えてあげましょう」という言葉も同様である。「相手のよいところ」といっても、見方を変えれば山ほどあるわけだし、そもそも「相手のよいところ」に意識をもってふだんから相手を見ているわけではないので、学習が苦手な子どもたちは、こういう言葉自体の意味がわからずにいる、といった場合も多いのである。このような「学習言語」に馴染めなければ、教科での子どもの学習は停滞してしまう場合が多い。特に、体育の場合は運動を内容として扱っているのも、より「言葉」との関係が他の教科に比べて難しい面もある。算数の問題を解く「コツ」は授業中にみんなで話したり考えたりすることはできるけれども、「逆上りのコツ」を授業中にみんなで話したり考えたりするのは、どのような言葉を使えばよいか、算数の時間よりもやはり難しいのではないかと。「学習言語」と「運動の言語化」という問題は、体育の時間をもつ「言語活動」に関する二重のハードルである。しかし、こうした言語活動がスムーズに行われなければ、運動を振り返ったり、工夫したり、評価したりなど、体育における課題解決活動はできない。この点からすると、この「学習言語」を理解し、使えるようになるということは、体育の学習指導においてはたいへん大きな問題であると言えるのである。

それでは、このような「学習言語」をどのように学ぶのかと考えたときに、ここでも力を発揮す

学習のねらい

できそうなわざにちょう戦したり、
できるわざをくり返したり組み合わせたりする。

例4 後方支持回転

①はらを鉄ぼうにつけて回る。

学習しよう

やってみる

できそうなわざにちょう戦しよう。

ひざかけ上がり、さか上がり、後方がたひざかけ回転、前方支持回転、転向前おりなどができること。

ひろげる

できるわざをくり返したり、組み合わせたりしてみよう。

「上がる⇒回る⇒おりる」わざを組み合わせせて行うことができること。

練習のしかたの例

●足をふり上げて、足打ちをする。①

■ やりやすい鉄ぼうで連続さか上がり②③

■ 後方かかえこみ回り②

※副読本『体育の学習』の詳しい構成については、次ページをご覧ください。

るのが「副読本」という教材である。「副読本」には、ほとんどの場合、体育で行う運動の内容が「言葉」で整理されていたり、学習の道筋や、学習活動のポイントなどが、授業で使う「言葉」として表され(上図)、子どもにもわかりやすいようにレイアウトされている。この意味では、「副読本」は単に運動の行い方が解説されているテキストというのではなく、教科の学習を進めるためにまとめられている特別な資料=教材なのである。もちろん、授業では子どもたちにいろいろな資料を作成したり、配ったりすることも多いけれども、「学習言語」を体系的に学べるほどのものを、年間を通じて用意することはなかなか難しい。このようなときに、子どもが手に取り、先生の直接的な指導とともに、あるときは指示を受け資料として見たり、あるときは自分から見たり読んだりして、「学習言語」を理解するとともに、体育の学習を支えてくれるはたらきをもつものが「副読本」なのであろう。

一方で「副読本」には、子どもたちどうしのつながりを生み出していく力もある。

よく経験されることだが、同じ教科書を使ったことがその後話題として「あー、それいっしょだった!」という共感につながったり、実際に同じ教科書を使っているからこそ、クラスが違っていても教え合うことができたりするなど、子どもたちにとって教科書や副読本は、「コミュニケーション・ボンド(きずな・つながりの保証)」としてのはたらきをもっているものである。これは、体育の授業の中でももちろん見られる。さまざまな場面においてグループで話し合うときに、共通に「副読本」を持って話し合うことが、子どもたちに手がかりを与え、互いの交流を活発にしていく。

もちろん、「副読本」から生まれるつながりは、子どもたちどうしに限られるものではない。それは、先生と子どもたちをもつなぐだけでなく、保護者や他の大人と子どもたちをもつなぐものでもある。「ここを見てごらん」「いま、こんなことやってるの」「こんなことが書いてあったよ」など。「副読本」があるからこそ広がるコミュニケーションが、体育の学習に必要ないくつもの「大きな学びの輪」を生み出すことはよく見られることである。こうした「副読本」がもつ力にも、私たちは目を向ける必要があるのではないかと思われる。

体育の学習をさらに豊かなものにするために

体育の時間を子どもたちにとってさらに豊かなものにするためには、ここまで見てきたように「副読本」という教材が果たす役割は大きい。特に、ただ運動を行えばよい、というのではなく、「生涯にわたって運動に親しむ能力や資質の基礎」を、子どもたちがしっかりと学習することによって身につけようとするとき、「副読本」は、体育の時間だからこそ、その「要」となるほどに豊かな力をもつものであるし、「副読本」とともに学習するというスタイル自体が、体育の授業の当たり前前の風景としてもっと全国で見られる必要があるように思われる。ところが、冒頭でも述べたように、体育の授業では「副読本」に対する認識と理解が弱く、「運動を行っていればよい」型の学習指導がまだまだ見られるのが現状である。

「本(副読本)とノートと鉛筆を持って体育の学習を行う」。こういう姿が多く为学校で普通に見られるようになることが期待されることである。

(教育社会学:まつだ・けいじ)